

国境を越えて考える必要がありそうなこと

アドヴァンス・サロン25号（1990年3月、能力開発工学センター）より

研究開発部 白尾彰浩

4年前にフィリピンに滞在したことがある。初めての海外で感じたのは物価を含めた生活費が日本と大きく違うことだ。地元の人は一食100円程度、一日200円で過ごすこともある。ごく普通の家庭である。日本人である私達は、一食に1000円くらい使うことも珍しくはなかった。約10倍。映画は150円くらい。日本は1500円（当時）。仲の良かったガードマンの月給は1万円以下。局長クラスの国家公務員でも3~4万円という。私の給料は17万円程度。10倍の違いを考えれば、現地にいる限り、私は170万円の給料をもらっていることになる。現地の人からはいつも大盤振舞いとみえる行動であったに違いない。

この格差をどう考えればよいのか。私にとっては一つの文化ショックならぬ社会格差ショックだった。同じ人間であり、親しい友人なのに生まれた場所が違うということだけで、片や生きていくための職を手にする事さえ難しい環境におかれているのである。これは運命だから仕方がないと考えるのだろうか。しかし、逆の立場であれば、のんびり構えてはいる余裕はない。生活するためにできることは何かといろいろ考える。

仕事が無ければ、あるところを探して出かけるのが当然だろう。そしてその働き口の一つが経済大国日本ということだ。フィリピンにいる間も仕事はないか、メイドでも何でもいい、と聞かれた。つい最近も、何か仕事はないかと手紙が来た。実際に働きに来ている知人もいる。大なり小なり同じような事情で日本に来ている外国人労働者は推計で十万人を超えるという。

日本は特殊な技能を持つ場合以外は外国人の労働を認めていない。従ってそのほとんどは違法である。しかし、実際には、働きたい者と雇いたい会社とが存在するのである。合法的でない限り闇の仲介人に活躍させる場を与えているようなものではないか。

世界の動きは、国という単位でとらえることはできない方向で進んでいる。国の労働者を守るという大義だけでは世界に通用しない。ヨーロッパには、西ドイツやフランスのように外国人を大量に受け入れた経験を持つ国がいろいろある。遅まきながら、これから対応を考えていく日本にとって参考になるだろう。世界の流れを踏まえ、日本国民一人ひとりが考えを持つ必要がある。そしてさらには、できる限り早い合法的措置を打ち出さなければならない。何しろ、多くの人が無の正当な補償もないままに酷使される毎日を過ごしているのだから。（了）